

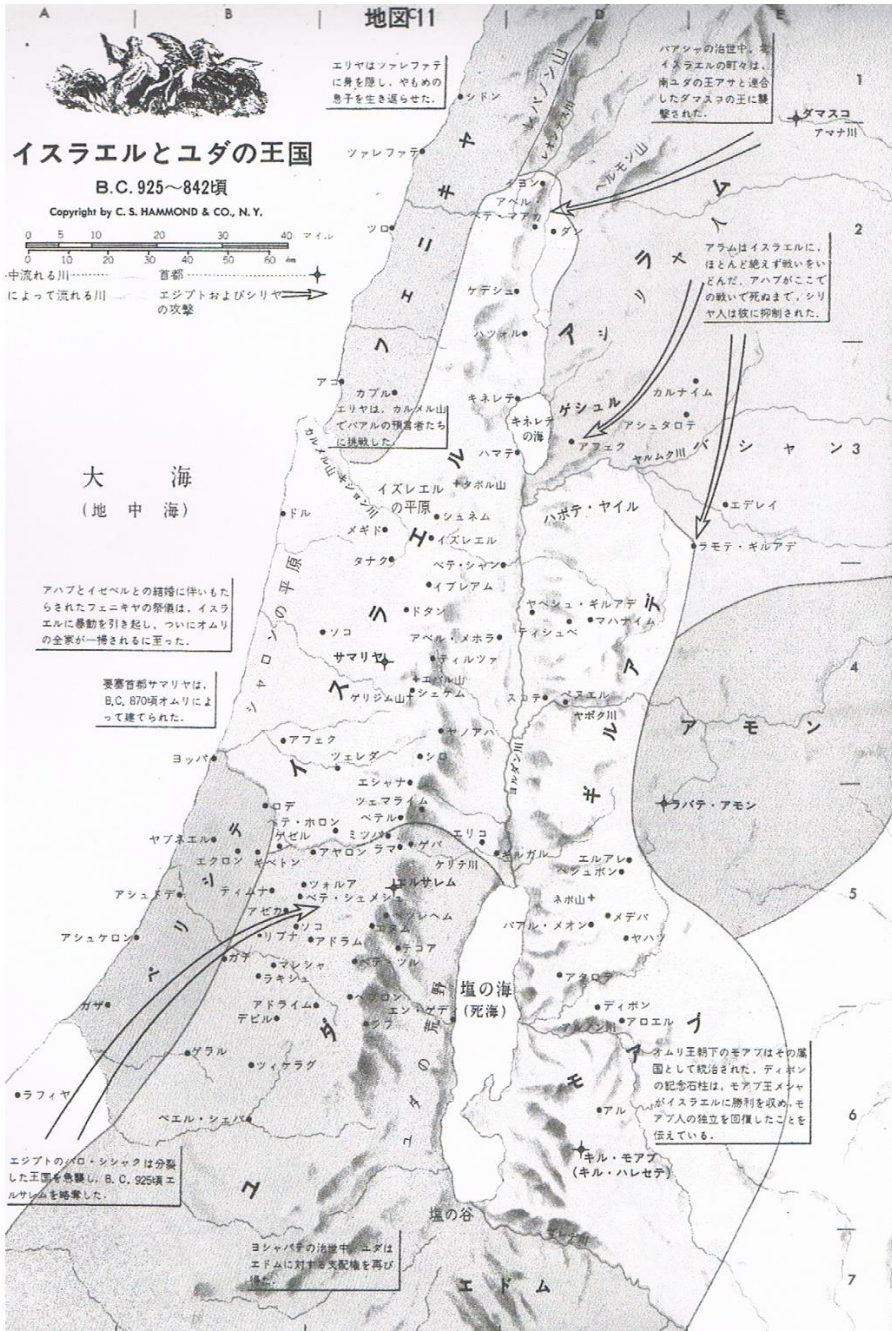
先週は 8 章 7~16 節を通して、アラムの国のベン・ハダデ王をその側近ハザエルが暗殺し、王に着くという出来事を見ました。それより前に、エリシャはハザエルの顔を凝視しながら、大泣きました。ハザエルにより、イスラエルの民が苦しむことを幻で見たからです。

1. 不信仰と恩寵 (16~19 節)

- ①南北の王ヨラム (16) 「イスラエルの王アハブの子ヨラムの第五年に~ヨシャパテがユダの王であったが~ユダの王ヨシャパテの子ヨラムが王となった。」 16 節からは、イスラエルとユダの王達の信仰が課題とされていきます。ソロモン王の後に国は北イスラエルと南ユダと分裂してしまいました。そして、北イスラエルには不信仰がまかり通り、偶像が礼拝されるようになりました。すでに見てきたように、アハブは長期にわたりイスラエルの王でその妻イゼベルは偶像礼拝の推進者でした。アハブ夫妻の子ヨラムも、聖書の神に従いませんでした。さてそのヨラム王 5 年目に、南王国ユダでは信仰の王ヨシャパテの子ヨラムが王となりました。南北の王の名前が同じになりました。でも別人です。
- ②南王国のヨラム王の不信仰 (17~18) 「彼は三十二歳で王となり、エルサレムで八年間、王であった。彼はアハブの家の者がしたように、イスラエルの王たちの道を歩んだ。アハブの娘が彼の妻であったからである。彼は主の目の前に悪を行ったが、」ユダのヨラム王は32歳で王となりました。在任期間は 8 年。比較的には、信仰深い王が多い南王国ユダの中であって、ヨラム王はその信仰から外れていきました。むしろ、北のアハブ王の影響がありました。どういっても、ユダのヨラム王の妻は、北のアハブ王の娘だったからです。彼は主の前に正しくありませんでした。
- ③灯を与え続けて下さる (19) 「主は、そのしもべダビデに免じて、ユダを滅ぼすことを望まれなかった。主はダビデとその子孫にいつまでもともしびを与えようと、彼に約束されたからである。」 義なる神からさばかれてもしかたがない状況です。ところが、主はこの国ユダを滅ぼすことはなさいませんでした。その理由は、ダビデ王の信仰がユダの国にずっと継承されてきたからです。この国が今後も、ご恩寵のうちに、信仰によって進んでいいけるようになってくださったのです。つまり、その子孫には、恵みの灯を備えようとしてくださるとの約束を維持して下さったのです。

2. ヨラム王の人生 (20~24 節)

- ①エドムへ夜襲 (20~21) 「ヨラムの時代に、エドムがそむいて、ユダの支配から脱し、自分たちの上に王を立てた。ヨラムは、すべての戦車を率いてツァイルへ渡って行き、夜襲を試み、彼を包囲していたエドムと戦車隊長を打ったので、その民は自分の天幕に逃げ帰った。」 さて、ユダ王ヨラムの時代、死海の南にあるエドムがユダに背いたのです。第二列王 3 章でモアブと戦うために、イスラエルとユダと共に、エド



ムも協力しています。ところが、今エドムはユダの支配から離れて、独自の王を立てたのです。南王国ユダのヨラム王は戦車、といっても鉄のタンクではなく、戦い用の馬車ですが、それらを率いてツァイル(場所は不明)に行き、夜襲を試みました。それまでユダの軍はエドムによって包囲されていたのです。夜襲の結果、包囲は解かれ、相手の戦車隊長を倒し、自軍の民は解放されて、天幕に逃げ帰ることができたのです。

②エドムの独立(22)「しかしなお、エドムはそむいて、ユダの支配から脱した。今日もそうである。リブナもまた、その時にそむこうとした」。しかし、戦いは続き、結果してエドムはユダの支配から脱し、その状態はその後も続いたというのです。

③ヨラム王の生と死(23~24)「ヨラムのその他の業績、彼の行ったすべての事、それはユダの王たちの年代記の書にしるされていないか。ヨラムは彼の先祖たちとともに眠り、先祖たちとともにダビデの町に葬られた。彼の子アハズヤが代わって王となった」。ユダのヨラム王については、第二歴代誌 21 章に記されていますが、彼は自らの治世を安定させるために、なんと自分の兄弟達 6 人やイスラエルの司も殺害していたのです。ヨラムは 40 歳の頃に不治の病となり、死にました。しかし、人々に悲しまれることがなかったとあります。

3. アハズヤ王の一年(25~29 節)

①アハズヤ王(25~26)「イスラエルの王アハブの子ヨラムの第十二年に、ユダの王ヨラムの子アハズヤが王となった。アハズヤは二十二歳で王となり、エルサレムで一年間、王であった。彼の母の名はアタルヤといい、イスラエルの王オムリの孫娘であった。」イスラエル王ヨラム王の 12 年に、ユダの王ヨラムの子アハズヤが王となりました。22 歳という若さでした。在任期間はわずか 1 年。彼の母アタルヤの名が記されていますが、オムリ王の孫娘で祖父からの不信仰を受け継いでいました。

②アハブの道を歩み(27~28)「彼はアハブの家の道に歩み、アハブの家にならって主の目の前に悪を行った。彼自身アハブ家の婿になっていたからである。彼はアハブの子ヨラムとともに、アラムの王ハザエルと戦うため、ラモテ・ギルアデに行ったが、アラム人はヨラムに傷を負わせた。」アハズヤはイスラエル王アハブの婿でした。ユダの王でしたが、その中身はアハブの不信仰を受け継ぐことになりました。彼はアラム王ハザエルと戦うために、ラモテ・ギルアデに行き、負傷します。

③ヨラムを見舞うアハズヤ(29)「ヨラム王は、アラムの王ハザエルと戦ったときにラマでアラム人に負わされた傷をいやすため、イズレエルに帰って来た。ユダの王ヨラムの子アハズヤは、アハブの子ヨラムが病気であったので、彼を見舞いにイズレエルに下って行った。」北王国イスラエルのヨラム王は、アラムのハザエル王と戦い、傷を負い、自国に戻りましたが、病気も患ったようです。ユダのアハズヤは、義理の兄弟ともなったヨラムの病気見舞いをしたのです。

《結論》

私たちは第二列王記を学んでいます。次の書である歴代誌 I, II には列王記と重なる内容が記されている部分があります。四福音書がキリストの言葉や行動を、それぞれ異なる観点から記しているのに、少し似ています。歴代誌には系図やそこに連なる人々や部族の土地などの詳しい記事が掲載され、資料のような役割を果たすためにその書が記されています。しかし、列王記に掲載されていない事実が、歴代誌に載っている場合があります。今朝の聖書箇所にもそのような部分があります。つまり、ユダのヨラム王が、自らに権力を集中させるためか、兄弟達を皆殺しにしていることや、病気を患って、死んだことなどは、歴代誌だけに記されています。

さて、そのヨラム王の不信仰は、国全体に及び、彼の責任は重いのです。このままでは、信仰を継承してきたユダの国の真の意味での存続も危く、神からの裁きを受けても致しがたい状態でした。ところが、主はこのユダの国を亡ぼすことはなさりませんでした。主はかつて、ダビデがユダの国の王となった時に、こう言われました。「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」(IIサムエル 7:12、13)と伝えてくださっていました。また、「そこにわたしはダビデのために、一つの角を生えさせよう。わたしは、わたしに油そそがれた者のために、一つのともしびを備えている。」(詩篇 132:17)とも約束してくださっていました。つまり、不信仰に陥ったユダでしたが、ダビデ以来の主の恵みの契約は、この時にも有効であったのです。もっとも、ヨラム王の不信仰と行状については、主は厳しい裁きをなさいました。忘れてはならない事です。

私たちのキリスト信仰についても、主は本当に救われた者に対して、その信仰を外れないように守ってくださっています。「聖徒の堅忍の教理」はそれです。ウェストミンスター信仰告白 11:5 にこうあります。「神は、義とされた者たちの罪を赦し続けられる。そして、彼らは、義認の状態から落ちてしまうことは決してありえないが、それでも、自らの罪によって、神の父としての不興を買い、そのため、へりくだって、自らの罪を告白し、赦しを乞い、自らの信仰と悔い改めを新たにするまでは、神の御顔の光を戻してもらえないことがある。」

私たちは大きな主のご恩寵の中にあります。本当に救われた者がそこから落ちてしまうことはないのです。だからと言って、神は罪を許容しておられるわけではありません。救われている者も罪を犯します。その罪を告白し、赦しをいただき、光のうちに戻していただくことが大切なのです。

今朝学んだ、ユダの国に神は恵みのうちに灯を保つことを良しとしてくださいました。恵みを忘れてしまいやすい者達です。主の教えから離れやすい者たちです。それでも、私たちに、いつまでも灯を与えようとしてくださっています。主に悔い改め、赦しをいただき、主の灯に照らされて歩いていきましょう。